

The background of the entire poster is a yellow-tinted photograph of a lecture hall. In the foreground, a male lecturer is seen from the chest up, wearing a dark suit and tie, and speaking into a microphone. Behind him, several rows of students are seated at desks, some looking towards the front. The overall atmosphere is that of a formal academic setting.

2020年

6月30日に

またここで

会おう

瀧 本 哲 史

伝説の東大講義

星海社

2020年6月30日にまたここで会おう

瀧本哲史伝説の東大講義

瀧本哲史

160



SEIKAISHA
SHINSHO

本講義は、去る2012年6月30日、
東京大学の伊藤謝恩ホールにて行われたものである。

生徒の参加資格を29歳以下に限定、
約300人の10代・20代が全国から集結した。

第一
檄

猿にはなるな





人のふりした



はい、瀧本^{たきもと}です。

とくに今日は自己紹介する必要もないと思うので、バーツと進めますね。
僕は話すのがちよつと速すぎるようで、よく通訳が必要とか言われるんですが（笑）、ここに集まったみなさんは頭も良いかと思うので、京大の授業でいつもやっているようにやります。

はい、ついてきてもらえればと。

で、今日のこの会場は、東京大学の伊藤^{いとう}謝恩^{しゃおん}ホールです。みなさん、「伊藤^{いとう}」って誰のことだか、わかります？ イトーヨーカ堂、セブンイレブン・ジャパン創業者の、伊藤雅俊^{まさとし}さんなんですね。

伊藤さんが50億円ぐらいをバーンと東大に寄付してくださいまして、今年、本郷^{ほんごう}キャンパスにこれができました。赤門の向こう側にある福武^{ふくたけ}ホールも、

ベネッセの福武さんが同じくらい寄付してくれて、造られたものなんです。欧米に比べて、日本の大学ってあんまり寄付してもらえないんですけど、最近では日本でもけっこう大きな実業の成功者が出て、その人が大学に寄付するってことが起こるようになってきました。

僕が本を書く理由

じつは僕は東大で、卒業生のネットワークをつくったり、寄付金を集める仕事を手伝っています。それでこういう大きな成果も出てくるようになってきたわけなんですけど、最近では並行して、本を出したり、多少メディアにも出るようになりました。

僕の仕事はエンジェル投資家であり、基本的に、あんまり表に出ないほうがいい業種なので、これまでは目立たないようにしてたんですね。でも最近、ちよつと考え方を変えまして。

いろいろ理由はあるんですが、一番の理由は、日本への危機感です。この国は、構造的に衰退に向かっているんじゃないかと。みなさんも感じているかと思いますが、中央政府とかエスタブリッシュメントと言われている人たちが、あんまり機能してないんじゃないか。

だから僕も裏方とかに逃げず、より積極的にひとを支援していかないとマズいなと思ったわけです。

一度、日本を捨てて海外脱出するというオプションを検討したこともあります。みなさんの中にも、「日本って基本的にオワコンだし、東大も世界レベルで見たらダメな大学になりつつある。もう海外に逃げよう」と考えてる人がいるかもしれません。

でも、よく考えてみた結果、僕は「残存者利益があるな」と思ってやめました。日本を見捨てる人が増えても、なんだかんだこの国は今もGDP3位ではありますし、中国に抜かれたって言っても、統計を細かく見るとそれもだいぶ疑わしい。日本にはいろいろまだ、過去の伝統もあるし基盤もありま

すから、むしろチャンスがあるんじゃないかと思ってます。

じゃあ、日本に残存して、どうやって日本を良くしていくか。

僕は、「武器モデル」を広めていくことで、それが可能になるんじゃないか
と思ってるんですね。

僕って、知ってる人は知ってると思いますけど、仕事を通じてこれまでい
ろんな分野で「カリスマ」のでっち上げとか創出を手がけてきました。

固有名詞は挙げませんが、けっこう大成功したんですよ。でも同時に、失
望もしました。いくらカリスマが生まれても、世の中あんまり変わらないん
ですよ。

アメリカのオバマ大統領が流行^{はや}らせた「チェンジ」という言葉があります。
彼も登場時は「世界を変えるカリスマだ」と期待されましたが、いま、オバ
マ政権になって4年が経って、何かアメリカは変わったかという、ぜんぜ
ん良くなってないですよ。

特定のリーダーをぶち上げて、その人が世の中を変えするという「カリスマモデル」は、どうもうまくいかないんじゃないか、という問題意識が大前提としてあります。

自ら明かりを燈^{とほ}せ

ちなみに「ワイマール前夜」って言葉をご存じの方、いらっしゃいますでしょうか？ もしくは、ワイマール共和政って聞いてわかる人、どれくらいいるかな？ この間も一橋^{ひとつばし}でこの話をしたんですけど……。

（会場 挙手）

なるほど、さすが東大は一橋より数が多いですね（笑）。

あ、僕の話は、いきなり脱線したりしますけど、ちゃんと全部つながっているの、ご安心ください。情報量が多いと思うのでメモしてる時間はない

と思います。レジュメが必要な人は、ネットに上げとくのであとで落としていくて下さい。

で、ワイマール共和政というのは、第一次世界大戦終戦後にドイツでできた政体せいたいですね。皇帝が退位したあとに、基本的人権とか社会権も明記したきわめて理想的な憲法がつくられて、素晴らしい民主的な国家ができたんです。ところが、理想だけは素晴らしいのに内実はボロボロで、政党はまとまらないし国としてダメダメで。もうほんとにダメだってときに、元軍人の、といっても伍長ごちやうでしたが、ひとりの売れない画家の人が、「俺がなんとかしてあげよう」と言って、出てきました。

そして国民の多くも、「この人がなんとかしてくれるかもしれない」と思っていて、その人を祭り上げてしまったわけですね。

その人、最初のうちはホント良くて、経済政策が大当たりして国の景気もむちゃくちゃ良くなり、「やっぱりあの人に任せて良かった」と国民の多くが

思ったんですが、その後どんどん変なことをやり始めて、あちこちにいろんな敵をつくって攻撃したり、やたら戦争を起こしたりして、結果的にドイツは大変なことになりました。

はい、ナチスのアドルフ・ヒトラーって方です。

けっこう今、日本もそれに近いところがあるんじゃないかと心配をしています。

ちよつと前も、理想的な政権がつくられたはずだったんですけど、フタを開けてみたらぜんぜんダメで、「政治家はいつも当てにならない」って空気が蔓延まんえんしてるところに、「西のほうにすべての問題を解決してくれるいい人がいるかもしれない」みたいな流れが、最近ありますよね（編集部注：大阪府知事、大阪市長を歴任していた橋下徹はしもととおる氏のこと）。

でも、それってまずいんじゃないかと思うんですよ。そういうことじゃないんじゃないかと。

誰かすごい人がすべてを決めてくれればうまくいく、という考えはたぶん

嘘^{うそ}で、「みなが自分で考え自分で決めていく世界」をつくっていくのが、国家の本来の姿なんじゃないかと僕は思ってます。

本にも書きましたが、仏教には「自燈明^{じとうみょう}」という言葉があります。開祖のブツダが亡くなるとき、弟子たちに「これから私たちは何を頼って生きていけばいいのでしょうか」と聞かれて、ブツダは「わしが死んだら、自分で考えて自分で決めろ。大事なことはすべて教えた」と答えました。

自ら明かりを燈せ。つまり、他の誰かがつけてくれた明かりに従って進むのではなく、自らが明かりになれば、と突き放したわけです。

これがきわめて大事だと僕は思いますね。

ソロス はなぜコピー機をバラまいたか

「ヘッジファンドの帝王」と呼ばれる、ジョージ・ソロスという人がいます。

投資の世界では超ビッグネームですが、みなさん、ご存じですかね？

（会場、数名が挙手）

あ、ちらほらいますね。

彼は「イングランド銀行を潰した男」とも言われてまして、サッチャー政権のときのイギリスの財政政策があまりにもひどいので、「これから通貨のポンドが暴落する」と予言して、巨額のポンドを空売りしたんですね。国に戦いを仕掛けたわけです。

それで困ったイギリス政府は一生懸命ポンドを買い支えたんですが、結局、国の資金が尽きてポンドは崩壊、ジョージ・ソロスは15億ドル儲けたという、とんでもない男です。

この人は1930年にハンガリーで生まれたユダヤ人でして、ナチス・ドイツにユダヤ人が迫害されまくっていた時代に少年期を過ごしました。

戦争が終わったあとともソ連が侵攻して国が混乱していたのでイギリスに移

住し、今はアメリカに住んでいます。

それでソ罗斯は、イギリスにいたときにロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに入学して、著名な科学哲学者として知られるカール・ポパーという人に弟子入りしたんですね。

本人は今も「本当は哲学者になりたかった」というぐらい哲学が好きなんですが、「君はあんまり学者に向いてないね」とポパーに言われて、やむを得ず金融業界に就職したという異色の経歴の持ち主です。

そういう、根っこに哲学があつて、戦争で苦労した経験から人間の自由意志を何より大切に考えるようになった人なので、ファンドマネージャーとして巨額の資産を持つようになってから、自分の思想の正しさを証明するために、「意見の多様性がない東欧の共産主義国を倒そう」という無謀な計画を立てるんです。

で、いろんなことをやっただんですが、ほとんどうまくいかなかったらしいんですよ。ところが唯一大成功した施策がありまして、それが「コピー機を

国中にバラまく」ことでした。

なんでコピー機をバラまくのがよかったかというと、共産主義国家では、国内にあるコピー機や印刷機はぜんぶ国家に管理されてるんです。つまり、自分の意見や主張を紙に印刷して広く発表する方法がなかった。

それでソロスが私財をはたいてコピー機をバラまいた瞬間から、いろんな活動家が自分のビラをバラまくようになって民主化運動が盛り上がっていき、その結果、母国のハンガリーだけでなく、ポーランドとかチェコスロバキアとかの東欧の国々がソ連から独立するのに成功したと言われています。

やっぱり、とんでもない人物です。

僕がカリスマジやダメだなと思っているときに、ふとソロスのことを思い出しまして、「意見をバラまくことには世の中を変える力があるんじゃないか」と思うようになり、それで僕は最近になって急に出版に力を入れているというわけです。

ものを言う道具

僕は、この講義の主催である星海社新書の軍事顧問に就任しています。名刺もあります。ちょっと出版社の肩書きで軍事顧問というのはあり得ないと思うんですが(笑)、「武器」とか「軍事顧問」という中二病的なネーミングの裏には、じつはこのソロスから学んだ思想があるんです。

要するに「何かすごいリーダーをひとりぶち上げるより、世の中を変えそうな人をたくさんつくって、誰がうまくいくかわからないけれども、そういう人たちに武器を与え、支援するような活動をしたほうが、実際に世の中を変えられる可能性は高いんじゃないか」ということ。

つまり、「カリスマモデル」でなく「武器モデル」です。

じゃあ、この国で誰に「武器」を配るのか？

想定しているのは全成人なんですが、その中でもとくにメインとしている

ターゲットは「20歳の若者」です。

次の日本を支える世代である彼らが自由人として生きていくために必要不可欠な「武器としての教養」を配りたいと思っています。

実際の話、「自由人」とか「成人」とか言ってますけど、まだ人間になつてない人もたくさんいるんですね。単に人の言うこと聞いて「アウーアウー」みたいな（会場笑）。

外見だけは人間なんですけど、やってることは人間以下という人が老若男（ろうにやくなん）女問（にょ）わず世の中にはたくさんいてですね、そういう人たちに「早く人間になつてくれ」ということです。厳しいことを言うと、「自分で考えてない人は、人じゃない」わけです。

かつてアリストテレスは「奴隷（どれい）とは何か？」という問いに、「ものを言う道具」と答えました。僕がいまの世の中を見ても、けっこうな数の「ものを言う道具」の人がいます。一応ものは言つて人間のかたちはしてるんですけど、自分の頭で考えてない人があまりに多いので、そういう人を人間にしなきゃ

いけないという問題意識というか、使命感もあります。

現代社会では、しっかり自分の頭で考えられない人間は、「コモディティ（替えのきく人材）」として買い叩かれるだけですからね。

100万部より価値のある「10部」

現代社会と言いましたが、僕たちが生きているこの社会の基本ルールというのは、資本主義、自由主義、民主主義の3つになります。これらをよく理解することなく、何かを考えたり努力しても徒勞（とらう）に終わるだけです。

じゃあ資本主義とはどういうものかというのと、ひとことでは言えませんが「計画経済の真逆（まぎやく）」ですね。

計画経済というのは、「どこかのすごい頭の良い人が、すべてを決める社会」です。旧ソ連とかがその代表でしょう。今の日本もじつはけっこう計画経済的なところが残ってて、東大とかを出ただけなのに、なぜか未来がわか

るらしくて、「これからの半導体産業はこうなる」とか言って、勝手に会社と会社をくっつけたりするなんて話がありますよね。その結果、大赤字になってその会社が潰れちゃったりしても、彼らは責任とらないんです。

僕なんかは「すごく賢くて未来がわかるのなら、ご自身でやられたらいいかですか?」と思いますけど、そういう人たちって自分が責任を負わねばならないことは、絶対やらないんですね。

それに対して資本主義というのは、大前提として「誰が正しいかよくわからない」んですよ。だから、いろんな人が自分のアイデアを出して、自己責任でやってみる。すると市場しじょうがそれを判定して、うまくいくものは大きくなるし、ダメなものは淘汰とうたされてやり直してみたいな、そういうゲームなわけです。

そして自由主義っていうのは、みんなが好きに活動できて、拘束こうそくされるのは基本的小さいお互いが納得して取り決めた契約とか、なんらかの義務があるときだけという社会です。

そして民主主義は、契約や法律のような社会全体のルールを、市民みんなが自分たちで決めるという社会です。

この資本主義、自由主義、民主主義をきちんと成立させるために共通して必要なのが、じつは、さっき言った「自分で考え自分で決める」ことなんです。

だから「自分で決める（決められる）」ことが超重要であり、それができる若い人を増やしたいと思ったので、僕は『武器としての決断思考』という決断がテーマの本を出したり、『武器としての交渉思考』という交渉の本を書いたりしています。

必要不可欠な武器をバラまいているわけです。

この残酷な高度資本主義社会の中でサバイブするために必要な思考と知識を『僕は君たちに武器を配りたい』という本に詰め込んでいるのも、同じ理由です。

ということ、僕は自分の本が何万部売れようと、それはしよせん通過点にすぎないと思っております。

正直、お金にはまったく困ってませんので、何万部売れても関係ないんですね。

最終的な目標は、若い人たちが大人になる前の読み物として、成人になるための読み物として、定番化すること。

目標となるのが『思考の整理学』という本です。

英文学者の外山^{とやましげひこ}滋比古先生が1986年に出した古い本ですが、いまでも地味に書店に置かれていて、なんとこれまでに200万部以上も売れてます。少しずつ、でも確実に毎年売れ続けて、20年以上かけて200万部になったわけです。

僕の本も、そういう売れ方をしてくれればいいな、と思ってます。長期間かけて常に誰かが買い続けてくれて、「この本は定番だよな」みたいな感じで読んでもらい、「まともな人間」が日本に増えればいい。

今はまだ人間じゃなくて、猿に近い人が、人間に変わっていくきっかけを与える、ということですね。

そしてそういう人間たちが、カリスマに頼ることなく自分たちで世の中を変えていく、その後方支援を僕はしたいんですよ。

あと大事なのは、本を読むだけではあんまり意味がないということです。

よく本を読んで「感動した!」とか言つて、明日になると完全に忘れて元の生活のままって人、すごい多いじゃないですか。それはぜんぜん意味がないと思うので、実際に本を読んでどれぐらいの人が行動を起こしたかということ、常にベンチマークとしています。

たとえば本が長い時間かけて100万部売れても、その100万人が何も変わらないより、たった10部しか売れてないけどその10人が何か大きなことをしてくれたほうが、僕にとってははるかに嬉しいし、世の中的にも価値があるでしょう。

本というのは「へえ、なるほど」と読んでオシマイではなく、読者が何か具体的に行動するためのきっかけづくりでないといけない。

そういうわけで僕は、出版するにとどまらず、わざわざ10代、20代のみなさんを全国からこんなところに集めて、今日の大アジテーション大会を開いたという次第です。

第一檄で手に入れた「武器」

★ 奴隷でも、猿でもなく、「人間」になろう。

★ 本を読んで終わり、人の話を聞いて終わ

りではなく、行動せよ！



第二 檄

は「言葉」である



最 重 要 の 学 問

この講義のテーマは、「次世代の君たちはどう生きるか」ということで、僕が思っていることをどんどん言っていけます。

はい、つぎです。

みなさん、『アメリカン・マインドの終焉』^{しゅうえん}という本、ご存じですか？

この場には10代と20代しかないなので、知ってるはずがないんですよ。知ってるとしたら、その人はかなり変わった人だと思うんですね。

なぜかというとその本は、みなさんがまだ生まれてないか幼児だった1990年頃に流行った本だからです。

イエール大学とかシカゴ大学で哲学を研究していたアラン・ブルームという哲学者が書いてるんですが、どんな本かというところ「最近のアメリカの大学は腐^{くさ}ってる！ けしからん！」ということが、450ページにわたって、延々

と書いてある本です（笑）。

文学とか哲学、芸術といった昔からの伝統ある学問を隅に追いやって、世の中に迎合して新しい分野の学部ばかり設置して、あげくの果てにわけのわからない「ダンス学部」とかまでつくったりして、大学がレジャーランドみたいになってる……みたいな感じで、むしろかしいプラトンの考えとかルソーの教育思想をひきながら、ひたすら批判してるんですね。

なんでこんな、分厚くて、堅くて、難解な本がアメリカでは大ベストセラーになるんだ、アメリカってやっぱりいい国なんだと、当時思った記憶があります。

教養の役割

で、その本の最初のほうに「教養はなんのために必要か」ということが書いてあるんですね。

ブルームによれば、「教養の役割とは、他の見方・考え方があり得ることを示すことである」と。

これは、けっこう超重要な定義でして、僕も同意見です。

たとえば歴史学とか美学、文学って、みなさんも大学1年の一般教養とかで学びましたよね？　なんで早く専攻に進めないのか、不思議に思ったりしませんでしたか。

オレは経済学部なのに文学なんて学んで、いったいなんの役に立つんだろうって。

でも、一見いますぐ役に立ちそうにないこと、目の前のテーマとは無関係に見えることが、じつは物事を考えるときの「参照の枠組み」として、非常に重要なんですよ。

経済学しか学ばない人、学べないような人は、実際あまり役に立たないんです。見方が一方的だったり狭すぎて、学問の新しい理論やジャンルを開拓していくことなんて、できないんですよ。これは仕事でもおなじです。

学問や学びというのは、答えを知ることではけつしてなくて、先人たちの思考や研究を通して、「新しい視点」を手に入れることです。

だから僕は、何かの「正解」を教えることはあんまりいいことじゃないとずっと思っていて、批判し続けています。

たとえばビジネス書の著者で、本で名前を売ったあとにセミナー始めて、セルフブランディング講座とか、なんとか塾とか開催してる人って、大勢いるじゃないですか。「これをやればあなたの仕事がうまくいきます!」とか、そういうの大っ嫌いなんですよ。

「わかりやすい答え」を求める人向けにインスタントな教えとかノウハウを提供するのって、簡単だけど意味ないんですね。

バイブルを否定せよ

でも多くの人は「わかりやすい答え」を求めてしまいます。

そのいい例が「バイブル」、つまり聖書です。聖書には「こういうふう生きていきなさい」という、ある意味「答え」が書いてあるんですね。

ユダヤ教とかイスラム教もバイブル性の高い宗教で、人が行動に迷ったときに教典きょうてんとかコーランを紐解ひもといて答えを探すと、「誰々という偉い人がそういうときはこうしなさいと述べた」って感じで、戒律かいりつとして指針が示されているので、迷わずに済むんです。

日本の仏教も宗派によつてはそういう細かい教えを伝えてるところがありますけど、僕は「神様にこれをお供そなえすれば明日から幸せになつて、年収も10倍アップ!」(会場笑)みたいな教えって、絶対に信じないほうがいいと思うんです。

だから今日の講義に來た人たちが僕の話聞いて、僕のことをカリスマみたいに思つて帰るとしたら、それは僕としてはぜんぜん嬉しいことはありません。僕の講演とか授業に來る若者たちの中には、いわゆる「意識高い系」の人たちがけっこういます。でもいつも僕は、「そういう意識だけ高い人がたくさん

ん集まって僕の話聞いたところで、明日からうまくいくようになると思ったら大間違いですよ」と言って、突き放すんです。

僕もやろうと思えばみなさんを騙すことなんてカンタンですよ。でも、どっちかというと僕の真意はその真逆で、チラシとかの煽り文に釣られて来た、ある意味ちよつと勘違いしがちな人たちに、「(講演の登壇者が)僕でよかったね」「他の人に騙されないよう、気をつけようね」と気づいてもらうのが、講演のほんとうの目的だったりします。

何度もうくり返しますが、「どこかに絶対的に正しい答えがあるんじゃないか」と考えること自体をやめること。バイブルとカリスマの否定というのが、僕の基本的な世界観になります。

でも「この世に真の教えなんてない。僕の話も信用するな」といった話をする、「ふざけんな、金返せ！」って、まあ今日は無料ですけど思う人もいるかもしれません。今日は、わざわざ福井から交通費かけて来た方もいらっ

しゃるそうなので。

はつきり言いますが、「真の教え」とか「法則」みたいなことを言う人は全員インチキです。

オウム真理教みたいなカルト宗教はよく「真の教えが公開される富士セミナーを5泊6日で開催します。真理を会得^{えとく}できてお値段はたったの50万円!」みたいな告知をして信徒を集めてますが、けっこう喜んで行っちゃう人がいるんですよ。一種の洗脳だと思いますけど。

宗教だと警戒する人も、テレビとかツイッターで有名な人の会合には、ホイホイとついていってしまったりします。

メディアに出るような人は頭も良いので、一見正しいことを言っているように見えますが、なんだかんだお金や影響力目当てで、洗脳的な活動をけっしてそうは見えないようにやっているだけだったりするので、注意が必要でしょう。

そういえば「脱洗脳」のプロとして活躍してたはずなのに、いつの間にか

自分もそういうセミナーを開催してる方が最近いますね。名前はちよつとみなさんで調べていただきたいんですけど（会場笑）。

でも、「ごめん！ 正解は僕にもよくわからないんですよ」って言ったら、「じゃあ私は、いったいどうしたらいいんですか……」って悩む人、ここにはいますか？

（会場、ひとり挙手）

あ、いますね。ありがとうございます。でも、あなたへの答えはすごく簡単です。「自分の人生は自分で考えて自分で決めてください」。

はい、これに尽きるんですね。

これは、「ブキケツ（武器としての決断思考）」の初版の帯に掲載したコピーでもあり、さっき言った自燈明ですよ。

「誰か」や「何か」に頼りたくなる気持ちは、僕も同じ人間なんでわからない

くもないです。でもその心の弱さに負けちゃいけないんです。

ただ、自分で考えるためにはやっぱり、考える枠組みが必要なんです。その枠組みが教養であり、リベラルアーツであるということです。

蘊蓄^{うんちく}や知識をひけらかすために教養があるわけではありません。自分自身を、抛りどころとするためにも、真に「学ぶ」必要があるんですよ。

自分で考えるための「ケースメソッド」

僕は現在、京都大学の教養課程で、全学部、全学年、院生も含めて、その人たちを相手に、リベラルアーツの一環として「起業論」の授業を担当し、起業家教育を行っています。

起業家教育というのは、ふつうはビジネススクールでしか教えてないんですね。伝統的な大学観からは、起業論というと世の中に直結しすぎていて、「大学の学問としては邪道^{じやどう}である」みたいに見られています。

ところが最近、アメリカのコネル大学のようなアイビーリーグの名門大学でも、リベラルアーツの中で起業論を教えるようになっています。それは、「起業家になる」ということ自体が、資本主義社会が持つエネルギーや、そのなかで生きていくための基本的なルールを学ぶことにつながる、という認識が広がったためです。

アラン・ブルームが批判した「世の中への迎合」とは、ちょっと意味合いが違います。経済学を学ぶのにも近い感覚です。

それで僕も実際にやってみたら、京大の中でも圧倒的な人気授業になったんですが、人気となった大きな理由は、授業のテーマ以上に、僕の東大法学部の指導教官だった内田貴^{うちだ たかし}先生の授業に倣^{なまら}って「ケースメソッド」を実践したことにあるんじゃないかと思っています。

ケースメソッドというのは、よく聞く「ケーススタディ」と似てますが、似て非^ひなるものですね。

どちらも学習領域に関する現実の事例^{ケース}をもとに、分析や調査を行って学ぶ方式ですが、ケーススタディでは事例も分析資料も基本的に教員が用意し、ふつうの授業のように生徒は一方的に先生の話を聞く「座学^{ざがく}」スタイルです。それに対してケースメソッドは、事例の選択からそれに関する資料、分析、調査、発表までを基本的に生徒が主体になって行い、教員と生徒とが「討議^{とうぎ}」しながら進めていくんですね。

欧米のロースクールやビジネススクールでは1930年代から取り入れられている教育方法ですが、日本に入ってきたのは最近で、内田先生はアメリカに留学した経験があつたので東大の授業でいち早くこれを取り入れたんです。でも、僕が学部生として受けた内田先生の授業は、2000人のクラスで、発言者が僕を含めて最前列にいつも座っている20人くらいしかないという、かなりヤバイ授業でしたが……（笑）。

そのときに内田先生は、「君たちはこの授業でケースメソッドについて学んだから、これからどこかで誰かを教えるときに、この方法を使うことができる

る。ふつうの人間はこのやり方では教えられないから、それは君たちにとって大きなアドバンテージになるはずだ」「そして法学教育も、いつかこういうふうに変わる日が必ず来る」と謎の予言をして、若いときの僕は「はあ、そうかあ」みたいに流していたわけですけど、それから20年ぐらい経って、内田先生の思惑おもわくとはまったく違うかたちで予言が当たる、ということが京大の僕の授業でいま起きているわけですね（苦笑）。

右手にロジック、左手にレトリックを

それで、今日ここに来ているみなさんは、じゃあ教養としてまずは「起業」について学ばいいのかというと、じつはそうではありません。

教養のなかで何を一番に学ぶべきか？

僕は、「言語」がもつとも重要だと思っています。

言語といっても、仕事で役立てるために英語や中国語やプログラミング言

語を勉強しろというセコイ話ではありません。みなさんがふだん日常的に使っている言葉、日本語、そこに秘められているすさまじい力を知って、とことん磨きあげてほしいんですよ。

言語にはギリシャのアリストテレスの時代から伝統的に、2つの機能があると言われていました。

「ロジック」と「レトリック」です。

ロジックというのは日本語で言えば「論理」ですが、もう少し意識すると、前提が真なら結論も真となるような推論の型のことで、ざっくり言うと、「誰もが納得できる理路を言葉にすること」ですね。

たとえば今日は6月30日ですが、「もうすぐ夏だから暑くなってきた」と言っても支離滅裂に聞こえないのは、一応、「夏⇨暑い」という背後のロジックがしっかりしているからです。

これが、「もうすぐ夏だから寒くなってきた」と言ったら、日本に限って言

えば誰も、理解も納得もしないでしょう。

そしてこのロジックを鍛^{きた}えるには、言葉の正しい運用の仕方や論理の構築の方法をしっかりと学ぶ必要があります。

僕は『武器としての決断思考』という本でディベートの考え方を詳しく書きましたが、まさにディベートは言葉のロジックを最大限に活用することで、自分の主張の正しさを的確に伝える行動なんです。

なのでおすすめるは、まずディベートをやってみることです。

言葉の機能のもう一つの「レトリック」は、日本語では「修^{しゅうじ}辞」と訳されます。簡単にいえば、「言葉をいかに魅力的に伝えるか」という技法がレトリックになります。

日本では「彼の言葉はレトリックしかない」とか、言葉を飾るだけみたいなネガティブなイメージで使われることも多いんですが、本来のギリシャ時代から続く弁論術のなかでは、レトリックについて、聴衆を魅了し、説得し

て賛成してもらうための重要な能力と位置づけています。

アメリカ大統領のオバマさんは、非常にスピーチがうまいことで知られています。彼の話し方や聴衆の心に響く言葉の選び方、伝え方は、ものすごくレトリックが優^{すぐ}れているんですね。

政治家としては亜流^{ありゅう}で知名度もなく、民族的にマイノリティでもありませんが、大衆の中に大きな熱狂を生み出し、ダークホースとして大統領選を勝ち残りました。

どんなに正しいロジックでも、良いレトリックが伴わなければ、それは聞く人の心にきちんと届かないし、まして行動を変えることなどできません。

つまり「言葉には力がある」ということは、究極的には、アメリカ合衆国の大統領になれるほどの力を持つ、ということでもあるんですね。はい。

日本でも、たとえば明治維新^{めいじしん}は、人々が「言葉の力」で国を動かした、わかりやすい好例^{こうれい}でしょう。

じつは明治維新って、あれだけ大きな社会変革だったのに、フランス革命とかアメリカの独立戦争と比べて、驚くくらい死者が少ない革命だったんです。フランスは100万人、アメリカは50万人だったのに対して、たしか3万人くらいだったかな。

それは、薩長ら倒幕派さつちやうとうばくはの人々が、武力よりも言語を使って意見を統一していき、仲間を増やしていくという活動を積極的に行ったからです。

明治維新というのは近代革命の中でも、際立って言葉を武器にして行われた革命だったと言えるんですよ。

民主主義の社会では、銃や鉄砲で政府を倒す必要はありません。

まず「言葉」によって正しい認識にいたり、「言葉」を磨くことでその認識の確度を上げていく。そして「言葉」を使って相手の行動を変えていくことで、仲間を増やし、世の中のルールや空気を変えていくことが可能なんです。ここにいるみんなにはぜひとも、今日から「言葉マニア」になってほしいと思います。

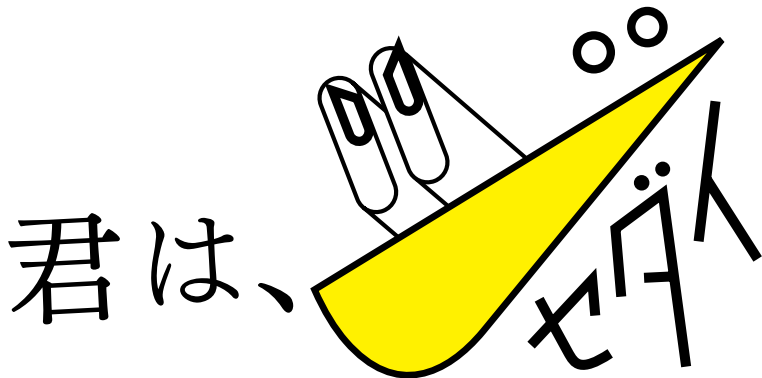
★「正解」なんてものはない。

★自分の人生は、自分で考えて、自分で決める。

★そのための「思考の枠組み」として、リベラルアーツがある。

★ 自分自身を抛^よりどころとするために、
学べ！

★ まずは「言葉マニア」になろう。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!